

鹿島市明治維新 150 年記念関連事業

「幕末維新期の鹿島～明君直彬を支えた人々～」ギャラリートーク

明君鍋島直彬が模範とした“鹿島藩主”篤誠院

平成 30 年 6 月 17 日(日)

鹿島市民図書館学芸部 高橋研一

おはようございます。鹿島市民図書館の学芸員高橋と申します。

昨年度、鹿島市の明治維新 150 年記念事業として『再発見鹿島の明治維新史』という本を作りました。この明治維新 150 年記念事業についてですが、県は県で、自治体は各自治体毎で、それぞれの取組みを行っています。鹿島の場合は、鹿島市からの委託事業として、鹿島市民図書館（鹿島市民立生涯学習・文化振興財団）が明治維新 150 年についての様々な調査研究普及活動を行っています。

どのような形で明治維新 150 年を成果として遺していくかという時に考えたのが、「顕彰」と「検証」という 2 つのキーワードです。ほとんどの場合が、前者の方の顕彰、褒め称えることがメインだと思います。顕彰することは、その地域にとって、こういう誇るべき人たちがいたことを知るという大きなメリットと同時に、デメリットがあります。それは、その地域でしか通用しないものになってしまう、ある種のお国自慢に陥ってしまいやすいということ、そして、すべてが英雄的な一個人の功績に帰せられてしまうことです。

明治維新に限らず、一つひとつの出来事をしっかりと史料に基づいて検証する。これまで聞いたものが実際どうだったのか、改めて検討する。私たちが今回やったのはこの「検証」です。これまで通説的に語られてきたものがどのような形で形成されてきたのか、いろんな人が書いた書物ではなくて、リアルタイム、当時書かれた古文書を徹底的に探して、それをしっかりと解説する。それによって、なるべく本当の、という表現がおかしいかもしれませんが、史実に近い歴史像にまずは触れる、その上で鹿島の明治維新とは何だったのかを考えるフィールドができるのかなということを進めたところです。

史料をしっかりと読み解くのは、なかなか根気の要る作業です。また、鹿島の古文書はいろんな所に散逸しているので、東京や沖縄など日本各地に散っていった鹿島の史料を追跡して、なるべく全体像を復元する努力をする必要があります。そうした中で、ある程度史料がそろってくると、それを読み、これまで書かれてきた鹿島の歴史を再検討する。語られてきたことが本当にそうだったのかを確認する作業です。

人が歴史を語るときには必ず枠組みがあります。戦前の皇国史観、戦後のマルクス主義史観が頭に浮かぶと思いますが、自分がこういう歴史を描きたい枠組みがあるわけです。鹿島の場合も、鹿島の歴史はこうあるべきだという筋書きのもとに書かれてきたものがあります。それは鹿島鍋島家がいかに素晴らしかったかを顕彰するために作られてきた枠組みになります。そういう中では、先ほどの閑叟公とい



っしょで、どうしても藩主が偉かったことになってしまいます。そして、直朝、直彬といった鹿島藩の中でも明君であった人に、焦点が合った話が紡ぎあげられていきます。

そうすると、女性や農民や商人などの話は、後方に退いてしまいます。そういう部分にもしっかりと光を当てて、そうした人々の記述も組み込んだ鹿島の歴史、幕末維新期の歴史を描くのが、今回の鹿島市明治維新 150 年記念事業でもっとも重視したことでした。鹿島の歴史を、鹿島だけではなくて、佐賀、あるいは日本でも共有してもらえる、そして関心を持って各地から鹿島の事を勉強してみたい人たちが来てくれる、そういうフィールドを作るのが今回の事業の役割といえます。

今日のギャラリートークの主演は、演題にもあるように、篤誠院という女性です。

鹿島の女性というと、祐徳院さんはずっと出てこられると思うのですが、祐徳院さん以外で、名前をあげることは中々難しいのではないのでしょうか。

それはなぜかという、鹿島の歴史を知るための史料が男性、そして政治を中心とした書き方になっているためです。女性がどういう場合に出てくるかという、藩主の奥さんの場合だと、結婚した、出産した、亡くなった、それ以外の場合には大きな罪を犯した、罪人ですね。その時にしか名前が出てこないです。近代になって、文化面で活躍した女性の名前が、ようやく記録として出るようになります。

まず、鹿島藩主の奥さんたちは、大きく正室、継室、側室に分けることができます。

正室は正式な奥さんです。鹿島藩主は 13 人いますが、正室の子供で鹿島藩主となったのは 3 人だけです。これは他の藩に比べても低い数字ではないでしょうか。藩政前期は、奥さんのほうが早く亡くなることが多いです。それに比べて後期になると、ものすごく長生きになります。80 歳を越える奥さんもいます。普明寺には歴代鹿島藩主の墓地がありますが、藩主の隣に建っているのは正室のお墓で、基本的に普明寺には正室のお墓しかありません。

正室が早く亡くなると、新しく正室が招かれます。これが継室です。祐徳院さんが代表的な例だと思います。継室の子供で藩主になった人はいません。それから、お墓は普明寺でなく、泰智寺に建てられています。

それから側室です。正室とは別に、鹿島藩士の家などから招かれた女性ですね。側室の子供で鹿島藩主になった人は 3 人います。ただ、正室がいる以上、側室は長く近くにいることができません。だから、ある程度の時期に様々な口実で、鹿島藩士に降嫁するということがあります。例えば、6 代藩主の直郷の実母は、直郷を産んだ後、酒見家に嫁がされています。赤ん坊は取り上げられて、正室のお子さんとして育てられます。この方のお墓は当然普明寺にも泰智寺にもありません。直郷としては自分のお母さんを祀りたいけど祀れない、お参りしたいけれど参れないということで、日蓮宗の本長寺にお墓を建て、そこにお参りし、実のお母さんのことを終生慕っています。

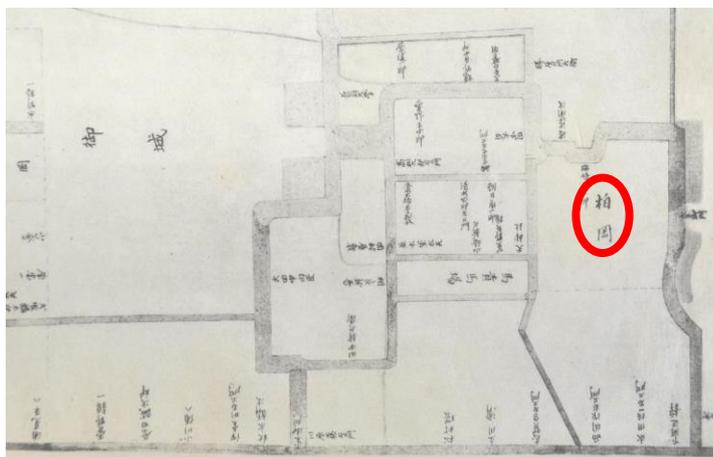
このように、正室は非常に強い権威と権限を持った女性になります。なぜかという、正室の実家が経済的、人的な部分を負担しているからです。実家と嫁ぎ先の経済力の規模が正室と旦那さんの力関係を大きく決めるという面もあるのです。初代忠茂、2 代正茂は佐賀藩や鹿島藩の藩士の家から奥さんを迎えています。そして、3 代直朝からは代々鍋島家同士での、非常に近い血縁関係での婚姻が繰り返されます。同じ支藩の小城鍋島家・蓮池鍋島家、佐賀藩の家臣である神代鍋島家などから奥さんが迎えられています。鹿島鍋島家は 2 万石です。これに対して、小城鍋島家は 7 万 3 千石、蓮池鍋島家は 5 万 2 千石、そして神代鍋島家は 5 千 5 百石です。こうした正室の実家の経済力が、正室のその後の活動を大きく左

右します。当然、2万石と5千石余では2万石の方、2万石と7万石では7万石が強い影響力を持ちます。

嫁いできた奥さんが、最初の頃何をするかという、実家のために動きます。小城から来た場合は、鹿島藩を小城の利益に沿うように動かすのです。そのために小城は経済的な負担をし、女中さんを小城から送り込みます。正室の居住空間は一種の大使館みたいなものですね。そして子供を産むと、だんだん鹿島に根付いていく。実家でも、実のお父さんやお母さんが亡くなり、関係が希薄になっていく。そして小城から仕送りも減っていく。そういった中で、正室も次第に小城ではなく、鹿島の人になっていくのです。そういう流れがずっと繰り返されてきました。この正室の背後に実家があることが、幕末期の鹿島藩を考える上において極めて重大な点です。

今回取り上げる篤誠院は小城藩主直愈なおますの娘として生まれています。幼名は賀千代よしちよ、鹿島藩の9代藩主直彝なおのりに嫁ぎ、その時に篤子と名前を変えられています。篤誠院さんが嫁がれた時に、鹿島藩は常広から高津原に城の移転が行われたばかりでした。嫁いで12年くらいで、直彝が亡くなります。その時に、髪を下ろして出家して篤誠院と名乗られます。当時は、藩主が亡くなると、奥さんはすぐ戒名をつけられました。直彬の場合も、直彬が亡くなった後、藹子さんはその後も15年くらい生きられるのですが、直彬が死んだ時点で戒名をつけられています。

鹿島城の中は、藩主とその奥さんが暮らす場なので、先代の奥さんはいつまでもとどまっていることはできません。篤誠院が屋敷を構えたのが柏岡という所です。鹿島城下の大手門に入ってすぐのところ。のちに、直彬のお母さん（朝春院）も鹿島城の裏門、搦め手門があった柳岡に隠居所を築いています。当時の鹿島城は、表から入ると、篤誠院の柏岡の屋敷が広がり、裏門から入ると、朝春院の柳岡の屋敷が広がる情景だったのです。



柏岡の所在地（『祐徳稻荷神社誌坤』）

篤誠院にはお子さんが2人おられました。

ただし、夫が藩主の座を退いた後に生まれて

います。長男直晴は神代鍋島家に養子に出されています。そして、神代鍋島家の当主として佐賀の家老職を勤めています。弘道館で学び、非常に優秀だったので、草場佩川が将来を嘱望しています。その後、鹿島藩主であった直永が隠居したため、急遽鹿島藩に呼び戻されます。天保10年（1839）に鹿島藩の11代藩主になったのですが、藩主になって直後の参勤交代で上って行く途中、伏見で亡くなります。わずか19歳でした。大阪まで元気で、そこから船に乗った瞬間に亡くなったため、その死をめぐってさまざまな憶測が飛び交っています。直晴が長生きすると、おそらく直彬の時代はなかった。直晴が鹿島や佐賀をリードした存在として後世に名を残したのではないかと思います。その方が篤誠院の長男です。

もう一人は季子という女性です。季子は佐賀藩のいちばん中心となる家老（請役当役）であった鍋島茂真に後妻として嫁いでいます。茂真は佐賀藩主閑叟の実兄で、閑叟が一番信頼を置いて家老に抜擢して藩政改革の中心を担ったほどの人物です。だから、篤誠院の人脈を考える時に、娘を通じて閑叟ともつながりをもっていたことは極めて重要な点だと思います。

篤誠院について、最も衆目すべき点は祐徳博物館に歴代藩主と並んで、夫人で唯一鎧が飾られていることです。ではなぜ鎧が必要なのかということですが、それが篤誠院に興味を持った始まりです。

幕末維新期の鹿島藩は、非常な危機的状況の中にいました。2万石、実収8千石ですが、その経済規模で参勤交代をする。そして様々な幕府の負担に耐えるのは、相当な無理がありました。そのため、参勤交代などの時には常に佐賀藩から援助をしてもらう。その援助によって、辛うじて参勤交代をする、あるいは江戸の屋敷の維持をすることが常態化していました。佐賀藩も資金が潤沢なときは、鹿島藩など支藩への援助は可能でした。しかし、幕末になって、佐賀藩は経済的な建て直しを進めると同時に、三重津海軍所や反射炉を中心とした技術革新、西洋の技術を導入した近代化を進めます。近代化を進めるためには、当然莫大な財源が必要です。その財源をどこから手に入れるかというときに、鹿島への補助金の削減が当然出てきます。それもあって、江戸時代を通じて佐賀藩を頼ってやってきていたものが、文化年間あたりからは、立ち行かなくなってしまったのです。

しかも、小城から、あるいは佐賀から養子を招くことが常態化すると、小城からついてきた人のグループ、佐賀からついてきた人のグループ、それから元々鹿島にいた人たちのグループ、この3つに鹿島藩の内部が割れてしまいます。そして、それぞれが藩主の地位をめぐって、あるいは奥さんをどこから招くかをめぐって、内部で抗争を繰り返していました。しかも、養子できた藩主が年少、あるいは病弱で、藩内をしっかりと統率できない。財政難と藩政の乱れが相俟って深刻な状況を呈していたのが幕末維新期直前の鹿島の状況だったのです。

佐賀藩からすれば、資金難に喘いでいるだけでなく、藩内も混乱している。いっそのこと併合してしまえば、つまり鹿島藩を廃藩にしてしまえば、資金援助の必要もなくなるし、鹿島の収益も佐賀藩の近代化のために使うことができると考えます。そして、2回にわたって鹿島廃藩を企てます。計画が浮上すると、小城藩と蓮池藩は、鹿島がやられると次は自分の番だと当然思います。だから、自分たちの存続のためにも、強硬に佐賀藩に反対をします。1回目の文化年間の時は、佐賀藩としてもすんなり引きました。ただ2回目の嘉永年間の時は、三重津海軍所なども造って、新しい技術のためにお金もどんどん必要としていた時期なので、佐賀藩としても容易に引きませんでした。

鹿島藩の危機的状況をより悪化させたのは鹿島藩主であり、鹿島藩士です。そのため、鹿島藩の発言力がほとんど認められない中で、唯一当事者能力を持って、小城藩・蓮池藩を動かして、佐賀藩と交渉し、鹿島藩を救ったのが、小城から嫁ぎ、鹿島藩主夫人となった篤誠院だったのです。篤誠院がいなければ、鹿島藩はこの時に廃藩となり、直彬の時代は来なかったかも知れません。

佐賀藩による鹿島廃藩計画は最終的に幕府が介入して、その仲裁によって、かろうじて鹿島藩の存続が認められます。そして、廃藩騒動の結果、直彬がわずか6歳で鹿島藩主として登場してくるようになります。

鹿島藩は廃藩を免れることはできましたが、一切お咎めがなかったわけではありません。鹿島藩は幕府から5年間の「公務用捨」という処分を受けています。具体的には5年間の参勤交代や幕府の奉仕を免除されています。財政難の鹿島藩にとって、一見都合の良いことのようにもみえますが、これは幕府から大名としての資格を停止されたことを意味する厳しい処分でした。鹿島藩は参勤交代をできない、つまり江戸で交流することは許されない時代になり、江戸の藩邸も縮小を余儀なくされました。藩主となった直彬が最初に直面した課題は、佐賀藩のさらなる介入を防ぎながら、幕府から停止された大名の

資格を取り戻すということだったのです。

それでは、鹿島藩の危機を救った篤誠院と、篤誠院が救った鹿島藩を率いることになった直彬の関係はどのようなものだったのでしょうか。両者の関係はこれまでの鹿島の歴史の中ではほとんど触れられてきませんでした。なぜかという、危機的な状況の中で生まれた直彬は非常に英邁で、自分で努力をして、自分で大きくなって、自分で明君になった、このストーリーがあるからです。直彬が誰かから強い影響を受けて成長したことは、直彬を明君として仰ぎ見る史観の中では中々触れられない部分です。しかもそれが女性であるとなおさらです。そのため、これまでの直彬の伝記からは篤誠院は切り落とされてしまっていたのです。

鹿島藩主となった直彬は文久2年(1862)に衆樂園を開いて、桜を植えます。そして、花見の季節になると、衆樂園を藩民に解放してお酒を振舞い、日頃の労をねぎらいます。これが衆楽の宴です。現在の旭ヶ岡公園の桜の源流です。衆落の宴は、直彬が民をいたわる思想



直彬が記した「衆楽」の扁額（鹿島市蔵）

持つ慈悲深い明君であったことを象徴するエピソードとして、よく知られています。

しかし、この直彬の発想の源流は、実は篤誠院が開いていた稲の花の宴にあります。篤誠院は毎年8月に、柏岡内に建てた貧楽亭で、稲の花を見る催物を開いていました。宴といっても、そこで出されるものは魚の干物と漬物で、質素な食事を食べながら、宴を催していたのです。お米を作って納めてくれる農民がいるからこそ、自分たちの生活があることを、そこに集う鹿島の藩士やその妻女に教える場として、篤誠院はこの稲の花の宴を行なっていました。その宴では和歌・漢詩・俳句が献じられます。しかもそこに集まる人たちは、鹿島の藩士だけではなく、小城・多久・武雄・伊万里からも詩文が献じられています。それらをまとめた詩文集が『富草集』で、24冊が現存し、祐徳稲荷神社に残っています。和歌や漢詩を総称して「文事」という言い方をしますが、篤誠院の文事につながる、あるいは参加する、そしてそこで編まれる書物に自分の和歌や漢詩が掲載されることは、当時の佐賀で文事に携わる人々にとっては一種のステイタスでした。それだけ篤誠院の存在と、その文事の力が佐賀藩全体から高く評価をされていたのです。

直彬は、自分で一から組み立てることはあまりしていない人です。ただし、言われたことを応用して、自分なりに解釈して、実際に行うことについては非常に優れた方です。篤誠院が行っていた稲花の宴に対して、桜花の宴を始めます。そして、篤誠院がやっていた稲花の宴が閉じられた空間であったのに対し、直彬は桜花の宴を藩民全体に公開する、広く集う場を作ったのです。ここに直彬の画期性があります。見聞して吸収したことを応用して、藩政に役立てる力、これが直彬の大きな素質だと思います。

直彬が藩主となった時、篤誠院は鹿島鍋島家の最長老でした。ちなみに直彬が6歳で藩主になった時、篤誠院は50歳、隠居した父直永は36歳、直彬の母は39歳、そして直前に隠居した直賢は15歳です。篤誠院が60歳になった時に、原忠順がお祝いの詩文を寄せています。その中に、篤誠院と直彬の関係が詳細に書かれています。要約すると「鹿島藩はこのままでは亡んでしまう。そうなってはいけないと思

った篤誠院が、6歳で藩主になった直彬に、とにかく立派に成長すること、そして先祖が代々守ってきた鹿島の土地をしっかりと守っていくように語り続けた。この篤誠院の薫陶を受けた直彬は、篤誠院の期待に応えるように学問を好むようになり、藩主として必要な教養をしっかりと身につけてきた。そして、日夜自分自身と鹿島藩のために心を研ぎ続ける立派な明君に成長した」という内容です。多少の誇張はあるかもしれませんが、篤誠院と直彬の関係の本質的な部分はここに集約されています。なぜ学問をしなければならないのか、藩主としてどのように振舞えばいいのか、どういう心得を持っておけばいいのか、こういったことを直彬に植え付けた人が篤誠院だったのです。

祐徳稲荷神社が所蔵している中川文庫は歴代の鹿島鍋島家が蒐集してきた膨大な書物です。この中に、篤誠院の蔵所印が押された書物も数多く含まれています。女性が集めた書物のかたまりが、大名文庫の中に入っているのはあまり例がありません。篤誠院が持っていた書物のかたまりに対して、鹿島鍋島家として引き続き持つべき価値と必要性があったからこそ、中川文庫に現存しているのです。

篤誠院が佐賀藩による廃藩運動に徹底して抵抗し、そして直彬に教育を施し、明君へと成長させた、その根底には書物があったのだと思います。幼い頃から小城で、しっかりとした教育を受け、自分の言葉で解釈をし、それを実行できる女性に育っていた。このことが篤誠院を他の藩主夫人たちと大きく違う点です。さらに、篤誠院は、常に書物の蒐集に意を砕き、女中などに命じて書写をさせています。政治や大名の故実に関する書物を蒐集し、熟読していたこと。このことが藩主夫人となった時に、藩主に代わる力を持って動けるだけの知識と教養を持った女性に育っていた背景だったのです。

もう一つ、篤誠院に関して取り上げているのが篤誠院に仕えた女中達です。鹿島藩に限らず、藩主の奥さんの身の回りのお世話役は基本的には女性です。一般的には男性は立ち入らない世界、藩主と自分が産んだ男の子くらいがそこにいる男性です。篤誠院の女中はどのようなものだったのかが、史料を読んで追い求めてきたことでした。

そもそも大名の女中制については、これまであまり研究されていない分野です。佐賀藩をみても、女中を取扱った論文や研究はないと思います。だから、調べようと思っても参考文献がない。参考文献がなかったら、自分で藩日記とかをめぐっていくしかありません。その中で、鹿島藩の女中制がようやくみえてきました。

これによって、篤誠院の女中は御老女—御中老—御側女中—御目付女中からなっていたことが分かってきました。御老女は女中を統括する役割で、年輩の女性が務めています。御中老は誰々の妻と表現されるような既婚の女性たちが務めています。そして、御側女中は誰々の娘や妹と表記され、未婚の若い女性が務めています。御目付女中は監督官みたいなものだと考えられます。

例えば、慶応元年（1865）に篤誠院が編んだ「雁金倭歌集」には、篤誠院の女中の役職と名前が記されています。御老女は矢橋という小城から派遣された女性が務めています。御側女中として、松尾佐藤太の妹きせ、星野猪代之允妹の妹みの、田澤彦太の娘いはが記されています。彼女達は鹿島藩士の娘です。これまでは名前が判明しても、続柄が分かりませんでした。和歌集には続柄が記されているため、どういった人の娘あるいは奥さんが篤誠院の女中となっていたことが初めてわかってきました。

篤誠院が鹿島に嫁いだ時、女中はすべて小城藩から付けられた女性達でした。その後、自分も結婚するなどがあって、小城に帰っていきます。代わりに小城から女中が派遣されますが、次第に鹿島藩から女中が採用されるようになります。幕末になると、統括する御老女は小城から引き続き派遣されていま

すが、その下の部分はすべて鹿島の女性に切り替わっています。

それでは、篤誠院はこういう女性達を集めて一体何をしていたかという、当然身の回りの世話をさせます。普通は身の回りの世話で終わります。ところが、篤誠院の違うところは、女中の教育にとっても熱心だったことです。例えば、書物は高価なので、書写して揃えます。おそらく篤誠院は、書物を書写させることによって、学問をまず教えていったのだらうと思います。それから和歌や行儀作法も当然、女中として身につけさせています。そして、さらに長刀、いわゆる武術までも学ばせています。

こうして篤誠院は、女中として仕えた上鹿島藩士の奥さんや娘を徹底して教育する。その人たちが結婚して、自分の家で生み育てた子供たちが、原忠順や田中鐵三郎、そして田澤義鋪になります。直彬の時代を支えた著名な人は、篤誠院の薫陶を受けた女性たちによって育てられたのです。そういう人たちによって、直彬の時代は支えられていたわけです。

それから篤誠院は女中の結婚にも積極的に関わっていました。例えば、小城藩士藤山沢右衛門の妹で、篤誠院と一緒にやってきた智恵は、鹿島藩の家老原家の奥さんになっています。それから、伊能忠敬が泊った本陣があった吉田家の娘の添も、女中として篤誠院に仕えていました。篤誠院は徹底した教育を施して、添は多久の草場船山（佩川の息子）に嫁いでいます。この添は西肥の女房百歌撰、佐賀の中でも優れた女性歌人の百人の中に選ばれています。それだけ才覚を持った女性を篤誠院は育てたのです。



篤誠院に仕えた田中縫
(田中鐵三郎の母)

こうやって直彬を支えていく基盤の中に篤誠院がいて、女中達を教育する。そしてその中で見出した有能な女性を、佐賀の中でも重要な人たちに嫁がせる。それによって鹿島藩を支える力を、小城や佐賀や多久に拡げていったのです。篤誠院によって、鹿島は、それまでの廢藩の危機におびえた時代とは全く違う、佐賀の中でも独特の存在感を持った地域として根付いていきました。そしてそれを直彬が引き継ぎ、より発展させたのです。

直彬が明君であったということから鹿島の歴史を組み立てようとする、今日のような話が出てこなかったと思います。男性中心に歴史を見てしまうと、どうしてもその枠組みの中に落ち込んでしまいます。それに対して、女性を中心とした見方、あるいは文化を中心とした見方を持つことはとても重要です。男性や政治を中心とした見方と女性や文化を中心とした見方、この二つを並べて、その間にある部分がある程度実像に近いものになってくるのではないのでしょうか。

今回の明治維新 150 年記念事業にあたって、書物や和歌集を重点的に調査して、篤誠院と女中の経歴を洗い出すことに力を注ぎました。その成果をもとに、今まで使われてきた史料をもう一回、見直していきました。史料は一回見ただけでは、きわめて表面的にしかわかりません。何回も見る。そして違うものと見比べながら、自分の視野を広げていく。確かな蓄積と視野の広がり歴史と史料を見る目を自然と深くしてくれます。そしてもう一回史料と対話する。その繰り返しの中で、ようやくこれまでの固定観念とは違う、本当の鹿島の歴史に触れる事ができるような時代がくるのではないかと思います。